

テーマ発問による道徳授業 こういうスタイルの道徳の授業をどう考えますか？

次の授業記録は、平成25年の6月に、H小のS先生が、4年生「てのひらの勇気（光村図書）」を使って【善悪の判断】を指導したものです。

資料の内容は、登校中に学級文庫の本を水たまりに落としたのに濡れたままの本を本棚に返し、帰りの会で問題となったが正直に言えなかった。その夜、人命救助をする消防士のニュースを見て言われた「危険を冒してやり抜くだけでなく、自分が正しいと思うことをするのも勇気だ」という父の言葉を思い出し、翌日の朝の会で正直に手を挙げようか迷うという内容です。

【導入】

T 今までに勇気が出なくて失敗したことを教えてください。

C おごりたくなかったけど友達やめるよと言われておごってしまった。

C 悪い点数を捨ててしまった。

C いとこが犬をいじめていたけど嫌われなかったからだめと言えなかった。

C お父さんのメモを捨て、後から怒られた。

C 公共のものを壊したのに、先生やお母さんに言えずにいたら、見つかって叱られた。

T そういうこと、あるよね。整理してみると、「いや」と言えなかった、嘘をついた、ごまかした、おごってしまった（板書）」

T 今日は、勇気について取り上げた「手のひらの勇気」という話です。

【展開前段】

T 資料範読

T1 この話を聞いて、ここを考えたいというところはありましたか。

C 手を挙げて正直に言えたか。

C ちゃんと本当に言えたか言えなかったか。

C 勇気を出して謝れたのか。

C 誤ったあとでみんなは許してくれたか。

C 消防士のニュースを見ていたときの主人公の気持ち。

T 消防隊を見ていたときの気持ちは。

C 勇気があったと思います。

T この話の続きを話し合ってみたいだね。（学習課題板書）腕に力を入れた後、主人公はどんな行動をしたのか話し合みましょう。

T まずは、グループで話し合みましょう。

T 発表してもらいます。

（以下の印は、○「言う」、△「迷う」、×「言わない」）

C○ニュースみたいに手を挙げたと思う。

C○後で怒られるより、今謝って許してもらったほうがいいから。

C○消防士もすごいけど、父さんの言葉のように言わなければ心の中がもやもやするから。

C×昨日は言わなかったから、今日言ったら、何で昨日言わなかったと言われてしまう。

C1×おおごとにはならないし、正直に言って100%怒られるより50%の逃げ道を選んだ方がいいから。

C△正直に言わなければ怒られるし、言わないと後でよけい怒られるから。

C△今言っても怒られるし、今言わないともやもやして後で言ってもっと怒られるから。

C○消防士に勇気もらい、父に正しいことをするのが勇気だと言われたから決心したから。

C△言うと言わなかったことを責められるし、後で見つかったときに無視されるから。

C○言わないと忘れられないし、言えばすっきりとするから。

C○もやもやした気持ちをすっきりしたいし、後で見つかったら怒られし、言わないとまたしちゃって嘘を繰り返すから。

C○正直に言えばみんなも許してくれるから。

C×最初は○だったけど、意見が変わって、50%の怒られる方が100%よりいいと思う。

C○昨日決心したからやっぱり言うと思う。

T （発表された意見を板書をもとに、言わない→迷う→言うの理由を下に振り返る。）

T2 では、主人公はどうすればよかったの？

- C 昨日のうちに言えばよかった。
- C 怒られるかもしれないけれど、正直に言う。
- C 帰りの会でいえなかったら朝の会で言う。
- C 学級文庫に濡れた本を入れたこと。
- C 主人公は、言えたほうが良かった。
- C 最初に言っておけばよかった。

【展開後段】

T3 主人公が正直に言うためには、どんなことが大切ですか。

- C 勇気→C 自分が正しいと思ったことを自分からやれる勇気。→C 勇気は絶対にいるし、正しいことは絶対に言わなければいけない。→C 恥ずかしくても言う勇気。
- C1 悪いことから逃げる癖がついてしまうから、正直に言う勇気。

【終末】

- T ハッピーノートに書いてみよう。→発表
- C すっきりと生活できるから、正直に言えるようにしたい。
- C 宿題を忘れて言えなかったことがあったので、これからは言いたい。
- C 授業中にもっと発言する勇気もてると良かった。

「テーマ発問」とは、過去の道徳の授業スタイルを打破するために東京学芸大学の永田繁雄教授が提唱している発問スタイルのことです。資料の主題（テーマ）そのものや資料中の主人公の生き方、資料を読んだ子供たちの疑問等に焦点を当て、それを直接掘り下げたり追求したりしようとする発問群のことです。今までの道徳で行われてきた、場面ごとの主人公の気持ちや行動を問う「場面発問」との違いをより鮮明にするために永田氏は使っています。

今回の授業記録では、学習課題を決めるための「T1 この話を聞いて、ここを考えたいというところはありましたか」や、主題や主人公の生き方に迫っていくための「T2 主人公はどうすればよかったの？」「T3 主人公が正直に言うためには、どんなことが大切ですか」などがそれにあたります。先生があらかじめ敷いた授業の路線に沿って

授業を進めるのではなく、資料に対する子供たちの興味や関心、資料のそのもののもつ主題性をうまく生かして授業を行うことができ、授業に対する子供たちの主体性を高めることができます。

永田氏は、「場面発問」で構成された授業を「テーマ発問」の授業に帰るために次の3つの方法を例示しています。（明治図書「道徳教育」より）

【よわむし太郎の「場面発問」例】

- ①太郎は子供や白鳥のことをどのように思っていたか。
- ②殿様の前に飛び出すまでにどんなことを考えていたか。
- ③涙をこぼしながら殿様の前に立つ太郎はどんな気持ちか。（中心発問）
- ④子供たちはどんな気持ちで太郎に走りよったか。

【「テーマ発問」の授業に近づける方法】

(1) 場面発問につなげてテーマ発問を織り込む方法

発問③④にさらに、「太郎が言いたいのはどんなことか」太郎がそこまでできたのはなぜか」と切り込む。

(2) 中心発問を場面発問にする方法

発問③を「太郎の行いから考える本当の勇気とはどんなものか」に変える。

(3) 学習テーマと中心発問をつなぐ方法

学習テーマを「本当の勇気とは何だろう」とし、資料範読のあとで、「本当の勇気はどんな勇気か。それは本当の勇気か」と発問する。

低学年では、発達段階から考えれば場面発問の授業で十分で、方法(1)に取り組みればすごいことだと思います。でも、中学年以上なら、ぜひとも(1)に慣れたら、徐々に方法(2)(3)に移行させ、挑戦的に取り組んでみたいものです。

なお、授業記録のC1は、この授業の抽出見でした。学級のリーダー的存在で、叱られるか叱られないかは半々だから、正直に言って100%叱られるより、黙っていて叱られない50%に掛けようという価値観を持つ勇者でした。C1は、他の子の意見を聞き、最後にはハッピーノート（道徳専用の横野大学ノート）に、「これからは正直に言うことにしよう」と書いていました。